第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	一般演題口演
タイトル	中山間地域における在宅患者の入院後の転帰について：後ろ向きコホート研究
日　　時	平成 25 年 3 月 30 日　10：30～10：40
会　　場	第８会議室
座　　長	村山大和診療所　森　清先生
演　　者	佐久総合病院付属小海診療所長　長谷田 真帆先生
企画趣旨	目的：在宅医療を受けている患者が入院するとどの程度自宅に帰って来られるか、それが ADL や基礎疾患・介護環境でどう異なるかにつき、後ろ向きコホート研究を行った。 対象：当院(在宅登録患者約 190 名、2011 年度在宅看取り率 38.3%、担癌患者約 10%、中山間地域にある無床の在宅療養支援診療所。緊急時受け入れ可能な二次救急病院が約 1 ㎞の距離にあり）の 2011 年 4 月 1 日から 2012 年 9 月 30 日までの在宅登録患者のべ 261 人のうち全入院 190 件を会議録から抽出した。2012 年 11 月末日まで入院継続中の 10 件、予定入院 20 件を除外した緊急入院 160 件につき診療情報提供から主病名、在院日数、転帰と、診療録から入院前の基礎疾患、ADL、家族類型を確認した。1)基礎疾患・ADL から終末期の軌道の 4 群(がんで寝たきり・がんで動ける・非がんで寝たきり・非がんで動ける)に分け、また 2)家族類型から介護力あり・なしの 2 群に分け、各群で入院後の転帰を比較した。 結果：緊急入院 160 件のうち主病名は感染症 66 件、基礎疾患の増悪 33 件、外傷 22 件、その他 39 件で、平均在院日数は 55.3 日であった。在宅療養を継続できたのは 96 件(60%)、退院後 2 週以内の在宅死亡 7 件(4.4%)で、病院死亡 38 件(23.7%)、施設入所 19 件(11.9%)と約 35%は自宅に帰ることができなかった。非がんやがんで動ける群の転帰は上記と類似したが、一方がんで寝たきりの群は 12 人中 2 人(17%)が自宅に帰ったものの残り 10 人(83%)は病院死亡となった。また自宅に帰ったのは、介護力のある群では 96 件中 72 件(75%)であったが介護力のない群では 64 件中 31 件(48%)に留まった。 結論：在宅患者が入院すると 3 割前後が自宅に一度も帰ることができなくなる。在宅医は患者や家族の背景から転帰をある程度予測し入院の是非を話し合う必要がある。